動物園

百合川庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
動物園

【Ｎコード】
Ｎ７４８４Ｆ

【作者名】
百合川庵

【あらすじ】
友人である女の子と動物園へ。わがままな彼女の意外な一面。

「ちょっと早くしなさいよ。なにしてるの？」
僕は同級生の女の子と一緒に動物園に来た。どうしようもなく自分勝手な、そして美しい女の子と。切符を買って今まさに敷地へと足を踏み出そうとしているところだ。僕たちは決して付き合っているわけではないけれど、彼女とはどこか馬が合ってたまにこうして一緒に行動することがある。理由は良くわからない。多分彼女は僕に対して僕以外の他人よりは幾分心を許しているのだろう。
「ねえ、人の話聞いてるの？早くしなさいよ」
「これでも急いでるんだよ。僕がどれほどの荷物を持ってると思う」と僕は息を切らしながら嘆いた。僕の背中にはリュックサックが二重になっているし、両手にも大人のカバの口を塞いでしまいそうなほどの荷物を持たされているのだ。
「そんなの関係ないわ、男でしょ」彼女はそう言って一人でさっさと園内に入ってしまった。
「ねえちょっと。はぐれたらまずいよ。僕はほとんど君の荷物を持ってるんだから」と僕は叫んだ。しかし彼女の小さくて可愛らしい耳に僕の声は聞こえていないようだった。
「ねえ」と僕はもう一度叫んだ。
「うるさいわね。白熊のところにいるから追いかけてきて」と言い残して彼女は小走りに白熊の檻へと向かった。

僕は息を切らせながら看板の指示に従った。ライオン、フラミンゴ、アシカと通り過ぎ、僕は一直線に白熊の檻へと向かった。すれ違う家族連れやカップルは僕の事を訝しそうな眼差しで見つめた。それはそうだ、僕の抱えている荷物の量はどう好意的に見ても休日の動物園に来る荷物ではない。三泊四日で旅行に行くほどの荷物だ。僕は遠慮なしに見つめてくる子供たちにいかにも訳ありな、顔の左半

分が引きつった微笑を返しながら白熊のところへと向かった。僕が笑うと少年少女たちはみなあきれたような顔で僕から目を離した。
「ねえ、早いってば」と僕はぜえぜえ言いながら彼女に言った。
彼女は返事をせず、じっと白熊のおおきな水槽を見つめていた。隣から眺めた彼女は、まっすぐで長い黒髪を耳にかけていた。悲しい色を帯びた彼女の横顔は確実にいつもの彼女とは違っていた。僕は彼女のその美しく、物悲しい横顔に不覚にもどきりとした。彼女はいつだって、どんな時だってそうなのだ。彼女の無関心さはいつも僕を無防備にする。
「ねえ」と僕は優しく話しかけてみた。しかし相変わらず返事は無かったので僕はしばらく同じ方向を見ている振りをしてじっとしていた。
十分くらいして、彼女は僕の方を向き、静かにこう言った。
「一緒にここで泳いでみようか」
いつもとは違う落ち着き払った笑顔とは裏腹に、彼女の口調と眼差しは真剣そのものだった。
「素晴らしい提案だけど、人が見てる。君の服じゃ濡れたときに全部下着まで透けてしまうよ」と僕は微笑んで言った。
「冗談に決まってるでしょ」と彼女はいつものような強い口調で言ってまた水槽に視線を戻した。
僕たちはそのまま一言も口を聞かずにその水槽に向かっていた。時間にして一時間ほどだ。
彼女がどう思っていたのかは知らないが、僕は徐々に白熊に、正確に言えば白熊とその住居に興味を持つようになっていた。彼らが何を考えて生きているのか理解したいと思った。彼らは気ままに深い水槽に飛び込んだり、僕たちから見れば殴りあったりしていた。しかしそれは愛情の表現であったりじゃれあいだったりしたのだろう。彼らは組み付きながら水の中に落ちてもけろっとしていた。あんな風に遊べたらさぞかし楽しいだろうな、と僕は思った。
「ちょっと、カズ」と彼女が僕の肩を叩いた。

「ん、ああ。どうしたの？」
「いつまでそこでぼおっとしているつもり？お弁当食べましょ、私が作ってきたから」と彼女は言った。
「君が？」と僕は驚いて言った。
「私は自分でもあきれるくらい自分勝手だけど、料理くらい出来るわ」と彼女は明らかに憤慨して言った。
「怒らないで、そういうつもりじゃない」と僕はしどろもどろになりながら言った。「それに君のわがままさは君自身をすごく綺麗に見せる。嘘じゃない」
「それが事実だとしても、慰めにはならない」と彼女は言った。「そんなことはどうでもいいのよ、おなかが空いたの。早くブルーシートを敷いて。お弁当を鞄から出して。早く」
「はいはい」と僕は言って近くにあった芝生の上に荷物を移動させて弁当の準備を始めた。
「お弁当はどの鞄に入っているの？」と僕は訊いた。
「そのしましまの鞄」と彼女はフランス国旗のような鞄を指差した。
「大事に扱ってよ、それ高いんだから」
「はいはい」と僕は言いながら二つの弁当箱を出した。
「開けてみて」と彼女は嬉しそうに言った。
僕は風呂敷を開いてふたを開けた。
「どう？」
「これ本当に君が作ったの？冗談じゃなくて？」と僕は本当に驚いて訊いた。
「そうよ」と彼女は誇らしげに鼻を鳴らした。
一つ目の弁当箱の中には綺麗に握られた俵おにぎりが、二つ目にはエビフライやから揚げ、厚焼き玉子、ひじきの煮物、塩さばなどいかにもおいしそうな定番のおかずが並んでいた。
「悪いけど、信じられない」と僕は言った。
「信じる信じないに関わらず、これは事実だわ。私が作った事実の結晶」と彼女は勝ち誇ったように言った。僕はううむともぐうとも

つかない声でうなっていた。
「どうでもいいから早く食べてよ」と彼女は言って、僕の肩を握りこぶしで叩いた。「これ作るためだけに何時に起きたと思ってるの？」
「食べるよ」と僕は言っておにぎりに箸をつけた。
「どう？おいしいでしょ」と彼女はうつむき加減になっておにぎりを食べている僕の顔を真下から覗き込んだ。
「信じられない」と僕は淡々とした声で繰り返した。
「うるさいわね、おいしいかおいしくないか聞かせてよ」と彼女は声を荒げた。
「とてもおいしい。まさに僕の好みのおにぎりだ。こんなしっかりしたものを君が作れただなんて、信じられない。失礼だとは思うけど」
「ん。たしかにおいしいわね」と彼女は厚焼き玉子を口いっぱいに頬張りながら言った。
「すごい」と僕は言った。
「でしょう。少しは見直したでしょう」
「少しなんてもんじゃないよ。君を奥さんにしても悪くないなんて思えてしまうほどおいしいよ」と僕は正直に言った。
「どういうことよそれ」と彼女は言って大きなおにぎりを口に投げ込んだ。そしてお茶をコップいっぱい流し込んだ。
「それほど君のお弁当はおいしいってことだよ、おいしいと言う事を言いたいだけなんだ」僕はから揚げを食べながら言った。「こんなおいしいから揚げなかなかないよ、いや本当に」
「そう」と彼女は呟いて黙々と食べていった。
彼女が黙ったので、僕も余計な口は出さずに食事に専念した。彼女の作ってきた弁当はどれも申し分なくおいしかった。
「ご馳走様」と僕は言った。
「もう食べないの？」と彼女はびっくりして訊いてきた。
「うん、もういいよ。おなかがいっぱいだ」と言って僕はいつもよ

り膨れた腹を叩いた。
「残ったのはどうするのよ、一生懸命作ったのに」と彼女は言った。
「もし良かったら僕が持って帰ってもいいかな？」と僕は訊いた。
「とてもおいしいからまたおなかを減らして食べたい」
「別に構わないけど」と彼女は言ってそっぽを向いた。嬉しいのだ、多分。
「じゃあもらうね」と僕は微笑んで言った。
「さあ、食事も終わったし片付けてよ」
「はいはい」と言って僕は手早く弁当箱をしまい、シートを畳んだ。
僕はなぜかこの手の雑務が恐ろしく得意だ。
「早いわね、さすが」と彼女は満足そうに言った。
「まあね」と僕は手短に返事をした。照れているのだ、多分。
「さて、そろそろ帰りましょうか」と彼女が言った。
「冗談だよね？まだ白熊しか見てないよ？」
「もういいじゃない、白熊を見たかっただけだもの」
「白熊だけ。入場料だって馬鹿にならない値段だった…」と僕が言いかけたとき彼女の声が耳に響いた。
「私は」と彼女ははっきり言った。「白熊を見たかったの。それだけだからもういいの。ご飯も一緒に食べたじゃない」
「わかったよ、じゃあ帰ろうか」と僕は荷物を全て背負い、手に持った。
「うん」と彼女は今日一番の笑顔を見せた。僕はその笑顔にまたどきりとした。
「さあ、帰ろうか」と僕はわざとくたびれた声で言った。
「早く」と彼女は言ってさっさと前に行ってしまった。「駅で待ってるから早く来てよ」

やっとの事で駅に着き、電車に乗り込んでから僕は荷物をどさっと降ろし、彼女に一つ質問をした。

「今日のことはデートと言っていいのかな」
「うーん、そう言ってしまえばそうだけど、そうじゃないと言えばそうじゃないわね」
彼女はあっけらかんと言って、ゆっくりと小さな頭を僕の肩に乗せた。僕の手にはフランス国旗のような手提げ鞄が握られている。秋だ。

（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
よければ感想をお書き下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7484f/

動物園

2010年10月8日15時51分発行